

会員さんってどんな人？



ジャーナリスト
のりはる
東京都羽村市 川島憲治 さん

エコセメント生産に回す現行処理の流れを見守っている。

これらの体験から分かったこと。
◆「浸出水はスポーツドリンクの味がした」 谷戸沢処分場の地下で集められた浸出水は処理施設で浄化して下水に流している。未処理の浸出水を口に含んでみたら塩分と甘みを感じるスポーツドリンクの味だった。

◆「地下水集排水管水は地下水ではなかった」 処分場の詳細な構造を理解すれば、周辺の側溝の雨水も一緒に集排水していたのでこの水が汚れている理由は理解できるはず。「毒水」が漏れている根拠にするのは難しい。

◆「エコセメントと普通セメントの毒性は同程度に有害」なら、普通セメントが環境的に許されるならエコセメントもOK。エコセメントが否定されるなら普通セメントも同様にNOを言わなければならなくなる。

◆「行政の姿勢も変わった」西多摩衛生組合に震災がれきなどの焼却依頼が持ち込まれ、その作業などの経緯取材したことがあった。この時の西衛担当者の姿勢は20年前に事件を起こした頃と大きく変わり、情報はオープンで仕事への自信と明るさが感じられた。震災がれきの焼却処分に反対する人もいたようで理解に苦しんだ。

Q ごみかん入会して下さったきっかけは？

A 焼却・埋め立てを回避する「住民運動」を息長く各地元で育てることの必要性を痛感したから。

Q 差し支えなければ、年齢と出身地を教えてください。

A 団塊世代の69歳。東京都大田区で育ち、武蔵野、小平などを経て、西多摩・羽村市に転居して30年を超えた。

Q ごみ問題に関心をもつようになったのは何故ですか？

A 1997年頃、西多摩衛生組合の焼却施設の建て替えによる環境問題と汚職の発覚に直面した。

さらに日の出町二ツ塚のごみ埋め立て処分場建設に伴う「現地紛争」、そして行政の情報隠しと強引な推進を目にしたこと。

日の出町を自らの足で歩き、紛争の原因と実態を少し深く見つめ直そうと自分なりに努力した。ごみ、環境などを「口実に」行政と対決するために動員されてきた人とは同化せず我が道を歩もうと思った。

「埋め立て」をごみの最終処分としないための方策を考えることに心を惹かれ、エコセメントを開発していた民間企業のプロジェクトの存在にたどり着く。エコセメントによって三多摩のごみの最終処分問題は救われたと考えて一安心している。

ごみの減容と悪臭対策などを目的とした「ごみを燃やす中間処理」は回避できる状況にはたどりつけず、より安全に収集して焼却処理をして

Q 特筆すべき近況があれば、教えてください。

A 終活は「レレレのおじさんのごとく」と思っている。

◆ 西多摩衛生組合を巡るごみ焼却の広域化の動きのウォッチングを続けている。

◆ 健康のために駅前までのウォーキングをしながら、毎日一人で道路のゴミ拾いをしている。小学生に会いさつしながら見守りをしている。

何だかレレレのおじさんのごとく「これでいいのだ」の心境に近づいている。ごみ問題は益々の身近な課題になっている

◆ 横田基地を取材してきた経験を生かし、西多摩新聞に「ヨコタ点描」を月1回連載中。

ごみ処分環境に関連しては、横田基地でのごみ処分がどのように行われてきたかの歴史を記述して残して置きたいと考えている。

◆「精神障がいしゃの居場所づくり」を人生最後の市民運動への関わりと考え、羽村市内で精神がい者と家族ともに立ち上げた「トワ・エ・モワ」サロンという名の居場所づくり運営に週2日のボランティアで参加している。

Q ごみかんに期待したいこと、あるいは提案したいことなどをお聞かせください

A 市民運動のあるべきモデルの一つとして切り開いてきた地平を守ってほしい。行政や企業も敵とせず味方につけて、自立した広がりのある影響力のある運動をさらに発展させることを期待している。